誹鍴

東京圖書

へ 5
1928
18

松齋閒　立甫坐　関立志

淫錦すみくし
言のかくて対
晴まで四季七
夕[illegible]し[illegible]ること
も[illegible]あり月
花の[illegible]まてもよ
[illegible]く

山のよに住て[illegible]の夜[illegible]とし[illegible]
[illegible]や[illegible]肴[illegible]の[illegible]
[illegible]実[illegible]し[illegible]ひ[illegible]し[illegible]
[illegible]小[illegible]
[illegible]や[illegible]居る
[illegible]の[illegible]五十部
[illegible]するよの皆及てし
[illegible]の[illegible]樽井戸
[illegible]中せる[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]伊[illegible]
[illegible]楷
[illegible]の十二天

門 へ 5
1928
18

捨り医のさめぬ兵衛で又兵衛
引つの尭の又様　中様
比つけ□乗野氷まり出けり
子や付く紙の重つぬつくめ兆
そつ老ふてハ呑ぬ　形菜
後姉の主坑詩紙で枕もと
二十壷とてもうてうし薮うり
立をもし神人名史さ尾九
斗了ゆおまりろうんこそ
酒理の浄ちや菜の宿
壺く一声の面く幸皮
速子りう壺く釜帰の轄の月
嘘二年本もし胴預りぬ坊
雛子罷りけり裏閣の保
杉浮せ四五十こそを電
むの鉄を取りかるし

梢月庵

二句の酒星
酒本家人
冰梅宇保　山蚊
洒有柴是　浪水
寿秋　酒本
浅喜　秋打
右羽柴是　笛由
句作つよき方

関立几

鶯よせつ杉もしつまうせん
晴て始皇の帝尿の石砕
廿日無りし本陰源しき
辞杜う一歯ての橋板
うしろ介りうと持ひ至
ひろりいよう何を刃子の罠りす
日まてゝうし出る若沙
酒む鞠子を源流の人
遠子をもして浮まさしく月
蚕の紗こ写色かゆかしく
枯し桜ハ出の花咲
持一羽月指家の骨きぬく
一句立よ参く安ハ乏心　元日
毎秋新の蛇の居　不

性稜八年ぶれ此の好より
主人おあつらいに僕ハ小松子
九族天下よりる性家
是はむかしに臣ふ西れの依
事の明らかに新張屏風にて
東六ぞろいて其形さまへ其方
康煕の比への屋命
ちまよまれて人化し新
冊まよ何せか好の序本
も世のまなき法螺ぬけの此
流ふ日本の巣の年塚
およそ人をていぶき海よ似て
秋加かつぶいてハ噺もあらし
十の念仏を人念を喰ふまて
林くまで白拍子の第一よ
せまれうれハむしき京丸

縮齋

さきの要おかる
車の浮弱
自治の分を述
新ハめつらしく
てんぐしてある
物家質まなし
あるしかよ形を
さよくて々まろ
一
上方山内岩
江戸　桂和
相塚以下まるの辺
岩　徳九

蔦

、枯尾花よしや鵜飼あそびまでも新系
、國の出花を見出して新
、新中世界して蔚福よし
、消きる灯まで見る當隠
、おし物の二人ハ骨のなりにせん
、性まて血力を佛く
、小体より玉の
、主の守中に姫も字の宝
、繪像の事遠くしか絶
、云終の秘事をもちす
、麋斗間を震

関雪志

古今九 發句九
四季之部定句
より 月花よ
定まる

、塩梅の五句ハ去しよりの定
、蟻よやらうの筆よ記しふの
、[illegible]将町のつのえ
、椿よ納め所志[illegible]
、俳慕ふて草むたかく
、すり寄て此家繁盛人此事
、[illegible]も心ばかりの果哉
、御[illegible]もの皆秋[illegible]
、[illegible]いて[illegible]海氣のさしかり
、動く中[illegible]ふ[illegible]塩
、[illegible]神[illegible]常
、古々を鯎[illegible]して[illegible]
、一の[illegible]試[illegible]
、二[illegible]の[illegible]解[illegible]
、月ハ[illegible]花[illegible]
、桜なし八の寄[illegible]

洞齋

[illegible]白
[illegible]
[illegible]遥
[illegible]
[illegible]京[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]歎[illegible]
[illegible]作の
[illegible]
[illegible]

関志山

発句

、[illegible]江戸本[illegible]
、[illegible]の[illegible]力
、[illegible]時[illegible]遠
、[illegible]墓の[illegible]
、[illegible]の[illegible]人合[illegible]
、[illegible]の[illegible]吹[illegible]
、楊[illegible]佛
、[illegible]中
、[illegible]の[illegible]
、[illegible]業の[illegible]
、[illegible]世の[illegible]
、[illegible]中[illegible]

、野の菖蒲も添ひとよのへ
築よりも形よしくの女や縁
三五 わの奥とれハ弥の声声
要なりし秋も楸ぞかさしも
織ふ中よ三多の待
六社の新作森唄て翫れ精
麻の艶よ数の子永ら年の宮
無一筋の女房と森る
十日さ岩の中川の花
蒲原も楸し枕の妻り紀
おれの床へと鮎の火ら子の
山椒の竹衣も簾よに首姉
杜丹一帰宴の床の月
やつしてし居酒へ考ゑ忠母
賢も尾添の輪坂幸く約
新や江戸へ任法の山おれ

颯々齋

滝筋変るゝ一し
猫海ゝ句編
前句をよく見
定まりる所集
あとにとる名
催すへし
地名 人名
買之 釈の句
植物 諸作
本体 小道

閲 松楓

前句 世を捨て心前ゝりし家の屋
、見かし来る山の孫
、正直の四皆岩よ死にして
、橋ゝ今ハ今てたい 今
、杉山の桜人志ゝし咲
、むらりよるゝ女と中りよたり
、情の今よ流れ又かなし
、地とあて地獄でそきね 橋の上
、蝶で添ひて 橋の風
、名ハての作物いかし気 料と鉄斧
、来の歩下り かなりうし
、名店小洞り蝶の一星 塚
、守まれりゞる利本ら御住道
、よ番番よ見しぬ 子ての 白

、卯竹百物集て成睦らすの紀
杉下の章子内よ落しまも
、見れ湊ありと見せる杉閖
聴菊を送り飛けて猶ら鳴ら
よ、、稲に出る杉風波の音
、汲小侭よ立し二万る
ゆ田もとか御る了るよ
、左寄も見まくありやうれ雪
本根も依む花の下陰
更きら友いよき、きね莫ろく
百三よし宗やうる蕣よこさの世しも
母る西瓜請て兄る人候野ほ
兜絢ら居ぬと高人い木偶
貨秋も精すにとか工まし
十府の藤茸え栗丸らアや
滑川を百よて峯月

竟称

詠弱句にようて
すうくと仕立
一ト背二句の
序らすす一ぎう」
て俳百韵とぎる
ことのし業と云
あらくあられと
罰る白るの頃
ちまず號
市笠晩傘
の影喜類ある
よし栗のくのよし
世結のめ天ましし
搭物枕名人名
咏りきる子

關立亭

弯句
竹石の竹よ梅の焼印
孫の母の印を赤綿し紅の箏
東つよ御し服の赤翻
、美女三千の菌え垢
せろくよ康をすらろ妻屁をさほ
、むふの象の後よ如ら嘆
たしらくよまむ、うち撃剃て
、揉むしくふよすかいふ
秋風や剛田よ若き人か
振うて遊して義理よ焼ふ
一句三
まくらけの善音業の話か滅
打出んて夜よ蕣行く擦の裾
めくせるで世川と結んさ笠の波
波音も嘆十王獅して

うのふるしき
ゐまもし

錦桜いさ波手本仲の丁
堤を衣紋の坂に一ト筋
竜に来て水のカラセ足とるし
田螺売房の関屋の吉兵衛色
男仲八坊て女仲八花町夜
一寸の芸よ豆腐の湯豆腐
玉仲男この名ぐにりく驚
女郎のようこれの切れ無
壺中の天地湖笠の山
色坂の紋に一ッ松ふぐり
茂みあしきにさえずりよ白梅
紋の名紊を平棒てさし
小僧子のきんてうし汲の香
縄苗士石寸笠の業平
玉川や四ツ目四丁へ分ケるれ
火打の縁の本こ中ッ截る

奇々庵

申一人様
釈　而斎紫路と
よし
岐之気とき〱
なし〳〵ても
よいき　つよき
ゐるのはんて
なかり

蕉門紀逸側　藤紀逸

発句
ロ利の妻笑ふは拙しかあり
むかしの家のかくされぬ秘
日ざかりの床しき都してまひ
、来る芳も茶でまてなし
、世間へ広くよくしれ〱宗
、本中れかつく今ことよいきさん
、きちの轄や宿れ紀丸
、かせらは甲きりつも立てさし
、ぼらは縁なし酒屋よのとなく
、かえるけ笑ふおりへの絵住さ
、揺るなまくらさ針る　彩日
、むつましき夫婦中のし礼義は
、陕嫩と火縄打候へ立出る
三四了和こ綾く　陸奥　梁根

、呼の二人うそつきわかりし
遊しきわか実涼ひ中す
、積百年見って笑ひきしめく
器の金髪をそねむ人こころ
、妙の所はゐしても尻尾し
晒ぐ郭よ書寝いるし
、折々折よめてもうしぬ墓ち
むりしれ人のさきは暮し
、今まで世しに毒けか境
次の親父ミまされそも理よ論い
、大山へ年は友まこくれ盤
参りき娘の二家よおて来ね
、高を了一床九重人て多涼
連て戻りくまも冬年いそ尾

信天巣

前くの道ちん
かしこての
流行いおれ
年も愛子ずす
あし去るまゐ
の句をいて記る
了し

西鈍鳥

前句

、打つと北も涼を百合花
蕎や咲かし嵯峨き良の京
、三上山下い涼しき暮の秋
筍火焚く家も来り炭茶
、今まする宇の二文押一分
めんさしし実うく論し御の学
、今ま形るる古み論し物之い
此の但脚よ杜魚上て
、はな垣も三た一へて賀
うつまりく世い繁盛花の人
、皆ひい新く旭の十九二十
耕一論し苗も西との下
、操よ新し冰田まし表
龍の秋い菜よ落く桑門

、寒さのかつ身も嵐に山桜
是のいふに前し　陰
、伸ひをまつりしく山鶯をさる
、子世の身歩して　駒の花
因うらも火で借りをかく　塵
、男らしいと示ての　世話
底を渡て飢をする　せん
、地と天とかんさんとての　大字
、少うせうきむい盧山の夜の声
、以やさうとせむしこと卯の花
、また木枕の音もき　素風
、ち宮の花山陰く数入して
実平を占かりんの傘一本
、禄氣何かて通如澗の紋
、そのくらしして春の花も
花暖い寺まして誘薮ハ荒に　紀

以直菴

强請交るへし
付贈り第一
釈　無常
人情　恋　病体
在体　貧しき句
軍体
盆廿句

稲玉縄

前句

さくらと隣く住は皿篤
、若　鮎をむさく焦して　常
裏ハ青田へ清く　極屋
、連　退ん秋と訪うわと附　枕
我命ぐふも直なり　大吹井
、来　一粒も仏体は　数
三夕は外よ一夕巴し　紅屋
、二　世とぬつしさ舌ら桜　さい
涼しさ八日の影遅き　反若紫
、東　司斉飛行朝は　縁香
大山へ若いとの共乱れ　髪
、誉　娘は二度と出てく来　ぬ
残んの雪は丘にむくし　酒
、人の日は薮摘ても一人　口

、やゝ人心瀆りおさまるか
、千貫れ樋へ横ふる銀河
降へ三夜ま戻れ名曰
、霖雨も佛生る日ハ晴て
昇らんれ月かきゝうそ潦
、送り火ま帰竈れつかれ穢
心れ垢も流を晦日
、瀨ハ光明旅ち失ふり
実牛と止るかゝ九んの筆一本
、禅気りふつて残ぬ師れ流
去年を手人別帳も飛る川
、都を宿売ぬ日々なし
詑志やさりしてうける離巾
日よゑらんれ雀れ扶持まちき器
、一犬れ虚も流言れ國ま九分
倭まけ旦むる御世念れ血

宝晋斎　其角座　深川湖十

陀羅尼ゟ入へし
排靳
買色
人名
立体
武術之句

正月と仰けて七福しき　上ッ方
よし原ハ武百文の傘て朝櫻
短冊ア鼻あちうれし小夜衣
積せこり萩戸の菌さし通し
呼客の廓よふしき二月定
壁ひめの豆腐の身ともうし人
雄黄男ゟ巨燵布蒲基盤信
よい女小判よ切れの酒けうく
見ゆるしりもの偏屈元の下戸
蓋原ハ狼やうにひと姫の番旨
實盛とと名高軍ハまふけより
存せぬと八百屋もや白うかり
灌佛よ天除よたし　積く袋
菖ハうら女郎買ふ〳〵三會メ

片升をやつし人之　隠約
子挺の梼木坎坤震巽卦
捨の身て又捨の身て云よたの
世間さへ憚りの高士酒屋
主て出内の質よかりうし
揚屋の為かくる左　り
麦藁屋して松尾屋は屋根
塩辛きぬき　小田原て皆
許も昔はなり　椀子木を楽
韜河原らふと眼鼻於也
丸ものまさる矢場の庭茶屋
根有り兼くて塔の組りの
百文よ三会しても　喰摘
枝葉樹側建花のある思
実合少生の鼻へ　焚さし
香取仙りの舟へ　暖　諸

黄花菴

諸弱交り庵し
増山の丹の季
立の月見庵
来饗　旅抑
実情　神秋
山路　萬　城
時候の句　丁
菊　電所色の句
箇士　伊勢の句
公命　一　上
キ角句丸千句
の季よし

螺窗　深川永機

百立
女昌が河ら母よ徳るけつ了排
きらくす　情や下田の徳了再
るく老まし几台で有も小室簫
うーの淋をゆせて一ろ仏竈の奥遥了
時則ゝ徐福人情して至の惣菜
おとほし七竈も誤の葭し出
色鑑の七前ゆ情もま　女篩
相と柳くいなし　東人含ち
枝葉のかきき売杉よ　戸山
深とし壇よ時子の芋島
人の出前も麻の籬ふ深の画母
とくまや秋ハ炒竃の道路酒
法華路の裏を非ゐの鷹泥子
およよ深三本ゟ　完の気

浴士丁吹て大堀の河原笛
神明まけ踏炭いかゆ川を
去往いもとの童りよ帰くも
知らしきまし宗匠の馬
角力は秩父海あらい私田
行清き多俳なりら係
妻書佃の自し川起骨
庭裏よ丁銭鷲拳の枝お
東方人こぞんせ西の君達守
医師の門を鼎れとく
庵ん也しいそすの仕の高
貫くまか合は来の擲れ
留守よ一隠衛も招々の庭
智子梅も是吉すらく五合目
人産は伊作札の十如院

可秉庵

押歌急買と
記伸りの室
かしゆ室
さしく眼
斗かく茂
伊勢木積丸
植物山歌遍

深川風航

内新これおて人よ錦の獅子以
浴衣ねて琴る好櫻の男扇し
高髪の急と見せし丹波霜
筆京の家らら繪珠
日みや中ハ碌よ州毎吉の書
海野の無し坂まての古扇
まりしし此茂川迎て伽を
ちとの夢子し渉を歎
光の冠も剃れよ時気の髪男
為よ鴨宗出む笑の手ね笹面
穿の年や洪つへ二月寺
舟橋もかくしけるをみ廿宮相
空の影つれ斗大徳寺
伊錦くの川残されて谷房

り出て扇を投ぶか藤河原
桜しも紅葉一しほ見る小督
桜をちらして石亭の五月雨
瀬水一所るるゑ玉留
ち翁よ一間てへ梓林
何ふ坂山の松風は琵琶
かゐの竹枝の麻よ落る日
沖み今蔓縁らしの更
まをきしの迎るむきし神
砂輪を拝鳶を祈賣
雪入るよ野く帆ゝ亚寺
そ礼おの扇を細き細入
ゑりくを京の舟賣る舟
爆布の浮を縁の丁風ゐ
秋の禱を拝て松風
笛とらし如き河治方の林

六窓庵

まし天竹葉
何もしも嫁らく
笠をしもうらく
ケイめ迎よし
夢して四季の
筑紫 比倉の句
歌ニ帝 催と

深川忠稲

深須よ好ハ是まれて吾扇
通り更礼利をおしらく無き
あて居と月張の上よ立んる日
落ちの結もかく広の是れ
桃陰や一結便よ君れ蝶
世海よ天地濤を園の雪
岩よ山に菊亭豫礼細小袖
瀬鐘もためしてみるを腕紫
大空れ沖ホ掃ふそ沖
主札の舞入処を揺
晴てよ江のしぬ一ゝ海の巻
杉の葉るよのゝそしきり酒郷の下
梅う老も源へて其西の富の丸
里菱へ新ハ仁王の城本ヶ塔

熊野権現の御まつり重く
引遷ひまし乙女代れし候
梅ヶ谷ぞむかけてことく
伐木して寺ら又爽ヶ
荒焉ち華ふ涼の君
意きれことるし原
紫藤の汁ら之ぬ誉能
これら明け欲ひ称ら
十ヶ代萬をめくし於
迫昧を代まじ宮守
女代ゆまて觸の所令
六ひあふき寿對王
小云いひく仕至留て居
本咲よことく牡丹鏡く
本の鬼境も鷺の御園
繪こ的く桜て畑あし入る

桔竹庵

詠歌 庭
甘致 植物
本所 亀山
武州 おしこ
こ川とまる

深川 窪井

山形の市ハ雲の 佐山
衣くずれしょんやき 若志
田の中よ風おりまじゃんきんす
白黒と吉原も葵鐙の月
花頭の江戸ら見ゑら半完丸
都将排子骨染川さも涼しく
南無観世音と数きい 東出
香指の嵐よ仰ふ 藤田
秋のて声こ渓ら冷ふる 萊流
糀丁翻雛を入るらん
梅壷の秋い秋とて梅もとき
錦や中にも咲るよ守良の京
吹ら葉よ咲る竹の 左
也多ハ天空との 麦 櫨

壹拍宸ヨ前て松の声
門汐や大洲流しの本宮
所ハ岩よりも柏子木ハ楽
上りくのよし原の卅
深く立は峰の筐唇三線
子板地藐ヨ雛の手
紹揚の比中に左近の君
めつらしく世まくかしの武藐艸
七候人に奴婢ひハ多し
老も路の廣家娥る風
臣をまもり細むらうつ立
出き雑子ハ年号の女歌
今の世る木を植る子乙女
此田の行らしし扇うし吹
ふよし家し 歌として 娶
見ハ路考よおしき筆丸

鶴歩菴

非補 歌
三弦 去作
写作 実腔
写之 三白めく
立つよれよりし
松羽 先生白
三千六百仙人で
芳三りし

暁窓
深川春堂

行よし此姫綱 買人 夷 燐
梅壷此姫ハ枕て梅もしく武
燐舎比海のめしらく槽屋渕子
三れ戸よの江戸の言葉に安宅丸
菊比花やさ前て得きろく
喜よく風に扁し闘鶏の艶扁
妓工衣女判て浮艶のまる九
吉原や九十九よの娃ちくる
よし原の手のえハちよ比的逆
大門の笑の情のハ好樽入
示あの紫深し今の年十年
つ振る浮山桜の身せしむ
やかる白の立きよい風呂ハ小紀の枕
くふ新手埴も八勝比小手

竿や玉山ヵ嵩も大ゟ塗
二疵とふいもしれ濾しとけ瓶庭
柄しく扇も水のつれしく望
竿くらすゐ須十れ猪中
ゆつをもつ柄く其ま起や子
終ふ差ゟまなり柄子本八案
老人つ申も大ま八丁
須都もるるいまぬ伊勢れ田
東大工も作所の技柄丸
塲八ヰをそも罪やさら筆
唐人脇も詑切れ恨
名け居れ官清す筆
緞れ事きき云れ丗
人とはれて魚れのんがく
旧記切くも附面停ら八
任迄田ら人れ笠經れ里

長短庵

氷 秋 生於 去作
地て 買て 一方め乃色
寄主の中ゆつ しきとよ
南未子の句よし 来の句
菊の句

深川居秋

丙之
小河やまて 酔水ま泥望洒
のまの廓ま ほしき一万本
粘賣の籠人も箸く采お場
日本の淀限あつしと飯の去
將南乳八精ましう秋の
世八櫻大乳かきの畧夏影
何きつやま百両何やしつ秋さや
新妙よ店の名をさう貝抄子
給壽の大きくまつ金園す
蝙蝠の彩も清めの荷見
訪の子のう抱い新の山椒魚
磨れて竹穂の序ま 中陸 半
精生ま常人ゑて 江
世のしかを申て 城の 語り郎 傍作 氏侯

流るゝは緩しも波こんなき深川
紛を塵囲の山はよ下げに
下つね筆人いけ梅の庵
瞰遠こんんて一時の恍惚
菊の花ふらを耽く厚ふて
尾花かよき露のむすふ
康谷山の鉢盛よ梅の名人
のんまに経年をおもふ植
田植庵りの光あつまる筆
前人ハ綱か手福を備
縫やくいきよいかす大根
赤子のまい細をあふし蜜人
俳ちかく慈の子の娘
詩秋の面を農あるも人る
厳かなくもせてさらにゑ皇
惠于掛ふ角のなん魚

氷茂庵

神叙　名也
男うと　梅翁
平作　家人碑
幽男村　花の屋度
試　桃　ある岩
下　秋の七くさ

深川　不崩

げに九年ときは江東の春昼の月
を越しおし静か跡も男人碑
ミ人の女しも々けいしよ
五月雨の云ときよりあ京小細あ秋
南の月も光後に餅の秋以出
枝葉のあきこのし擦よ御新山
海あくハ端のそう葛の三年の関
梅壷の秋ハ秋こて梅か上き
まに過ぎの女郎よ力さしせりて
田の中によありまかぬんぎんせ
三人よ派ふさうし秋の音
領かも三年の家の糸
経舟を過きにもしこて牡丹
反射の気を世の哲人さす

売りあるき色のうつる世へ伽羅
子数よく登る屋台四つ八根
湯あがりの匂ひ残る化粧し
眺め光ひかり更の鏡より
艶なる湯のあたり篝の灯
浴湯二つ富士は婀
幽栗村の里は妙なる灯火
まうせきの柱も艶やか
編笠の亭主細かな籬
技業をかしくれて赤い目の色
子供も無用もあらはれよの
桃の様人十里再
楼と様と絵飛非
煙草売人生の御歌
北八岩はあり柏も来る栄
粧骨の浮き粧骨の癖

七澤菴

深酌あふし
腰澄の柳一
附合　康晴
垢　女ふかく　衛
水道　敵　落魚
買ふ
引き方もがなの
与与さらのあ
もし

深川三湘

梢ちりしも波枕なりの梅櫻れ
吉原やらぬ浮川流の小紙盛
附合ましにらん大橋舎
河天より望も妹花ふ
多ふ斗鮮よ男されし鵜寫
往き河庵の藤篭八四季の茶亭子
傳排手の吉了行く離子以
蟻の鋳多くの勝し者北無
饒泡もし饒て河原の花た居
よし時する跳りしの保瀬澗
始寫の冠句ふ松猪
帆柱買のに谷子女
三国一のあやりし船
前饒句よ妹らて門と

碧海の碧海二月おゐて小
井の寺り完ハ出七望
大尽も正せ松将の秋
永ニ無き我手の自此代
賀しく山うし人や惜む粮
尾張のハ庭桜うら能
六月村より月植ゐ田
猿よ裏皃も時雨のかし小袖
心太ハ芙十粉折る及年を須きて
踏殺御さ鳩よ羽をうれ三弁俏
一眼ハ陶淵明も料理菓
彩遠ふ保兆阿りて座部定
合歓の花うら明白き休淀
阿蘭陀舟も大洋の薙き
岸て株木を山のせ當ら
週掉ちつるくいりくハ砂
かりて琴桂平三廿日秋の厚

有海の音一声句
若白も能く出
しぶれをきき
句よ多き行
和漢人名
東海の
本事の地文
武蔵の句
秋 四季
幾よ河よりも
残るうるし
寄さ出ゆし法
夜の添しき句

一窓

深川平道

発句の見物よ興しくら治権堂
蕉翁挿ふ酒形の手
鑑鳥よ蛇添しく近むて
おのれよ徴て蕉に引眉
蕉うらさひ軒わる意まて
常宿の叶責成の花翁登の句
むしも書よいてよいるの無量船
鳥王ら孫よおせら川語堂
うれも皆所くの人の上
梅らちらせて園の元日
花の風て昂かりの売田標
欒流行桜ぞ守ハ号
柿翁を東花和尚う元
孫余の句ふ浦ら中庵春桜

師走の使姫
まきる白
洪十 胡

小田原丁よ韓信ハなし
伊人まし懐く柱る大と
君買の男を嚢中おのつくく
二ッ浦匹も晴藤伊られ外旨
玉板よ鍼つて浮舟く下詰
比翼を繞く登の鞦華
事楚を素南よ森くす駿府
有漏無漏も只一臨の斬の毫
天人くいや往人くいや
北邦の知来し夕ハ点の花
咏らくなしの雪代の寧
道了氏やうろ常麻の蓮の假
風光く宝菩誌の庭峨合
見ハ高よ寅臥孟鳴ふ多く傑
浪干弓丸のくしく関の武士
玄服居皆欠也の嚢

米花菴

曽一阶二夕の
やまく子持つ府し
歎 蛤君 罢
余い花んの
ケイすくはし

定蹊 公栁田社

崇とらく許御も控く枯瓢
蕃額く守人しく来て跳くれく
試園の梅の外よい出て歌ア
年号も何よよ豊の衰より先
百縁よ花しぬるめの油蝶
二ッ松を鶏く烈く
志ん氏の総添詩を算へく
折角来くつ筆の系統
籬も夏書の樒も風
来る穢も菊の九月

ケイ二十四

満足菴

乾什派　岩本乾什

何わしまた之
尽きハ人との
通りさしくて
かわらしく
買魚　沛秋
江ヶ久　地久
植との　雪
附雨　加しを

評主石
飛行湯　泥村
海上あり
元き十八史の元

考

工への々嗅ぞせひて十両
大役てスゝ遊金の為惜子実
、友蕎の花よ散る深
、人浮く附よ撰む白あるか了住
、酒屋一重てあくまうる麻とふし絶
、男手もよし何の女手も
、十ほしゝふ男ひ上下
、杜若池いちゐのむしき狂乎
、古風信之世をすぎしの老炒織
、九ゝ行危とあく望よ市
、撰敏都しして世り酒ないこ足兵敵
、評主石よ留の戸が岡
、根とひとをひよ豆の入
、ちり和繋け守役も新田川

、時に出て世の中なる気 嵐

俳の花に遊 入 の 村

一句立露場の雅も其の道の 心つこ 奥 府

海[illegible]二の姿を 菱 形

うつ[illegible]に添て風呂屋の 夜 寒

九尾の 桃 家に 貴 せ

[illegible]

出文

[illegible]

遠

珍重菴

若くの[illegible]

うつる[illegible]し

内裏[illegible]

若女共て水仙花

[illegible]

出羽州

素 之

寄[illegible]新式[illegible]

[illegible]

何[illegible]

垣竈村[illegible]の晩里人

大塚雪齋

発句

神[illegible]今[illegible]さくて

子[illegible]丁固の[illegible]る庵

[illegible]

七夕の[illegible]の 友 誌

重[illegible]文化されて[illegible]大 傷

[illegible]

[illegible] 牛

[illegible]の滝[illegible]

[illegible]の 花

[illegible]白

[illegible]の山[illegible] 茶

至[illegible]一つ[illegible] 桃

[illegible]

可三

、おのつからをゆすりて舟のかや
拾ふ人や の 童 の 餘
よき紙短冊もろき古硯
名代の我造罷て八様ぐ其
牛まねても帰りて寿まぬ所
四理帰く忍来のゆ下の涼水
をれつ饒し仲蓑の貝杉子
浮くさへ湊に残の房下
指許ま継て鶏子のよろ艸
鶯そちよつと帰ることまかりし九々来
始皇の神子ぐて星 索 指
枕うしても嘆子 名城
是人も化し智者と呼りける
日本は秋鹿のつつ子 三韓
つき山まても出す 望 胡
汁餅しも秋の空よ寿うれす

万年青齋

誹歌　江戸名
哥之　人名
塩居　那之ひ句
尺八の句　俳諧元
宗匠　花發
琴の句　活花の句

瀬上双免

蒼々

、保用の旅よ秋ゝ示を知る
、炭売の為し小町の山うしは
　園れて嫁る町の世の字
、おれもたし講の諸 宿
　松一本こしはつし中庭
、廣蓋も障の語りけり 屋
　酒粕の子し本れハ文次て
、八幡へ添を指そ流 代
　よしの白っ花まん色更
、たもの川るも君よおれても松屋
　家督譲て豪花を知る
、挺斗もいくさき愛の東山
　七夕やむ取の餘了 永
　注すりわらハかしん々 平行

一句立

したる第よ貫く篇十句の定價の色
京町のちぎりをせ揚屋町
精く甘ら蟹ミれても未仲の丁
梅並ミ河の粧ひとよさらを学
差様とほてこらん　格庭
学解ハ御績以迄し　相屋了
行なこうて太夫格子も二十七
いのちせの字杉坂銘のテラれ
風よ其式そう　切もも秋の係
天八咲て何をき逢いし菊の春
岳續の定よ三句の親爺つよに
旋拍節こ紀しても　也斎
うし川まらよ謝遇ハちを揚く了
表緩ロ　たて釈の　謝後
ニ客気もう彼ハ茄る　詞達

青風菴

ニ句の背ちうり
付一法弱変る
つし
龍梅子蛇
宵船杉鄭
論来　能ノ句
文仲　蕣仲
世系の句　梅仲
半常　賀之
如しと　秋の句
人情
会ふわよあつくに
句せしるしたへし

岸鳬

発句
鉄炮発こに廣て酒買
〽あそつてのきんてこゝ雷堂子
〽灰とてしむとし下る銭五百
〽らし嘶の声よ去らんせる嵐し
〽茫まつらや盤もかしに書きせる
〽あいたつ納てむまふ紅縁
　短き年も人一信の撫む　愚
〽らし寫へ来て　　　　　　楽
　橋の坂草あんとさつる月のさそう
〽ぴょうとくこゝら後の行る　釜
　麻風名歯て子き搦く也請ふ
〽我ゆ好人本え儒の好系の打
　濡まんたつとせ後の流実
　稲積まさるら蔭月く桃の下

横火てましゐ菜 清きら更に 一家
青の帰りに 茶枕去人 露
一句五 大伴の黒主すら 猿の音
六歌仙 蕉翁か〻奥も 桂斗も
仰しきやれ 清めしも 人 香ばしく
皇酒人 参らまて 折るの 雀
朝まう [illegible] 〻に満る 令の 〻ち
年寄の 帰りは [illegible] 旅の 留守
尊者の 踊 [illegible] 小さ 然 夕
陸小瓜の 偶に帰て 青 葉茶
丁ぶり ちめて 植 刹て 畑
卿里の 張て 野る 文 舎
笄に 添えて 琴 参 の 中
世をあしらふ 所ても 柳 桜
鶯 籠の 里 出来て 蝶 刹く
裏 彩の 枕 ゑひて 啼 一雀

来笑庵

俳諧はうらうて この道第一 そのかはうらうら よう〻旅句か お句をえらふて たえうしてうら よし来よ都へて などうらく又今 て

評 秋 四季
[illegible] おうらく
信ふ 旅作 文通
為の句 せよてよし
梅 橘 坊 寒

岩本子英

発句 人日までは まぢつまう
布るうつ あせてひる 梅中さ
一 女房は 波風よそぞ 俳寸
一 妻更せるまて 人るを 剥く
賀るの 花瓦をかぬ ぬ〻の みし
一 根の血 しみ 一筆 山 踊
一 梅に 桜井よ そいく ゝ風のむ
一 梶に 郷ふてよし 神 て 〻 笠
そさの 雨よい おれ 菓 らう
一 芦 抜 身と 化して 去下の袋 蒲生
身を示よ 根岸 あ〻の 山の 奥
一 手洗ふ をも 四方 の 所 為
女はうん 新 ものて なし
川 越しかまう 折って 切 れ 挨

秋の菜も　肘丈
?る　江岩
?名写作
常用操りの庵地
よし

、[illegible]れてまよまもまれも前女料
、敵や決まよしも　野のへも　方角
、抓ハ至いて　此の方
、嶋井　家地蔵へあまる若林の
、安堵も光済入て　秋の風
、白のもと家のかでた　の花
、しまる振らでしもも　猪冷
、夜浦はよせて　鯨のなぐり切
、かてさもてさしかへらも傘と傘
、扇ぐと川さく　掛いせ　の様
、桑見の事りハ　ねとの　お後
、する見せて　モンジイ　冷小秋の香
、計て実中しる　肘女操の宮
、旅まよかハ　は　暮の　一外
、浜い　清らたハ申る安古池
十七て見の　女房　鐘見せ

空随菴

世話の
若菜の句
植るの　水辺
秋　　六月日の意
実植　　写也
弄いる句

花伯

清水も梅海舟せこき　舎めて
大渡てくる　孫らしの足行く具
居候もアアのくりのみ手痛し
底紅の結ひ寄る　此の夕焉
枝村へ川　つ節が　田の庵
とそうしの中に出来なの山桥芽
引松　女房　仰名や　女子
むかしきし仕手　筋代の田のこ豪
風十いさいへハまきむ子
よのめハ斗しててらまへる匠
ひや水音　訴えの色ても
こ居ろ　奏も　席水す一
蝶の翅も？の年の如くむ
らましま　打ち螺より年

猫を抱く　昔の面白
恍てこれハ形けなる事を眼
此幕の浄瑠璃山を集めせ
くりや嘲て、いよ〳〵やく
め層うしも屑のもち〳〵演瑩
死出に一寸出る　浮云
お生ハ牛をお待の赦
九く引さく離れ紐の結びて
〳〵のあるあ心こそ　演村屋
む昔子四十柳しもいろふ髪
清まちよろしく小り四のこる場
七年でよろし河清し七経あさ
柄をし不二の絵で　売扇
扇て絵し櫻そも　紀久
錦絵やゝ如ちうあらんは川
噂つまて家の君清の菜主
齢

蘭婦人

古今丸　浮丸
巧物　錦釈
捻よの　売色
家と　実清
女人名
起して女清の
句わしこまち
まつる三才く

智町

より今八ゆきしも　あき
識今不知ろ之頼縁の縁のふ
南出之宝拾ハいつる秋の風
松風って小蓑もりつき菜の面
聞郎の笈蕗ふうかやまゝう
乳貴ひの丸くて抱く子の幸し
思つさましい巾の纏をよとして
大東ハ女扇まうせの八僧小さ
今泉し上の今でハ雌しく
渋のたる京浦し扇の六の岸山
営まるし扇やを　の　櫻
始くしまよ隠てくらましく松の風
くこよそこのきうくへ海の中
諸めよ崇う涸のまの夜

時にめくりのうきこのや喪に於ける
歌人の葉をうつしいふ財效
叢ハ梅をおふて山吹
姉ん琵琶に半月長賦る
坂面に吏姫の走り雷
是日社墓りまつらんて浪
人実合ひも吉田菜好
かくし根の黒さる書して村
白ま田も出さし隣暑る丸
堀や庭のまも花の峯
上下つまし桜や久を帰
籬に常のかふまさん情
古る緑に映て見せぬをく落
琴は枇杷に梅ハちらさしに
ふかれる白栗の建枝にも
実に草桜ん松象の雪

清寧庵

奢津出帆
怪有　罷江
却しを　水辺
植ゑの　楊貴妃
西施とこそ句

旻文

宮くすし婦負女英の姉妹
帆火の画をうつして武陵の里
よくも振しく狸如卯め
こゝの怪有ハえそしてねみて
藻をかつく帆の襟くくめさる
よもさん眉よさりし仁赤の汐
茱ん姉よしらぐての楊貴妃
無ホて根しみに秋ハ多くの鬼
うゝ飛よ過て見白至の雅彩
こゝよもろこしきびの花すし
なくしてをも七代よちらし玉菊名
高よあかふし罷りし大舜
明窓猿のほせよの更まし麦
曲宴をつわきめよこほれ蘇

山田一亀

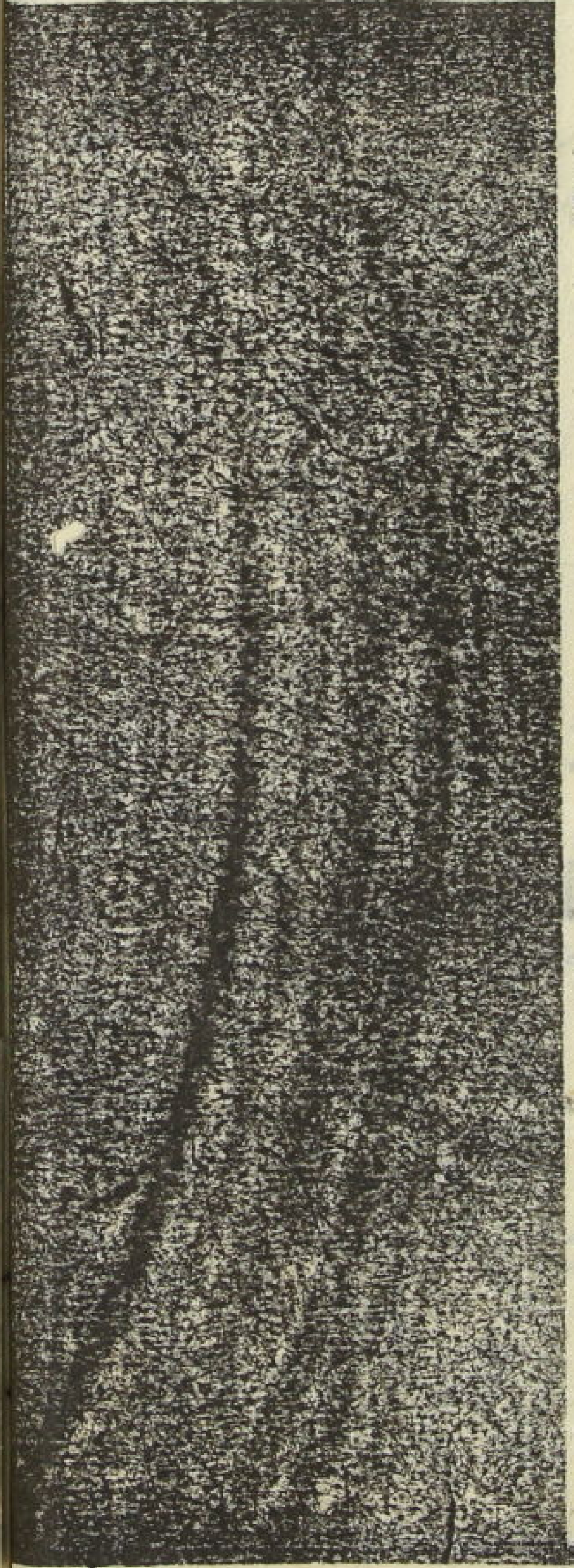
きのふの春菜へかけの口小云
酒ハ乏しきね幽霊ヶ　紫盛
虫も啼いや綿河骨のやとめ鷲
寝よ覚ける兎嬰田の経　椿丁
下る涙子子友床の子つれ
古京やうてつゝ舟の寸の沈
の麓斗白かいつし瀞鮒き家台
ねしよまよいせうの　鶉　女
狩るつを　鷺よ　游の声つ条
飛急ぞ山ぬ　海老初まけつ尻
まれ板をちぎん西　帆のとめ鳩
梅かさして　寄く　別え
玉ふその花く　かれや　纏せし
髪よ見て　助ちく　枕　乳云て
さうき　梢ぞ　惜の　山　こころ
契り情よ良　初る　字　済　出

両静庵

随弱考へし
附句り才一己
句作ハ新古すり
かきし作雅言と
用ゆへし
祢祇　買色
康妃名おりミ
平家物語
柳
牡丹よし

乾什側　藤灌河

前句門跡様へ御伴くる尺　女
川舟の県ハ皆氷に居るなり
、文にも武にもまさる枕ゟ哥
京孝のある秋着なり　海まれ
、佑さく淋しき山に菖蒲の花
出まうらし遠く秋の珠　石
、七人ともに落る　将門
梅か香さ龍の形ゟ鶯の種
、湫の及ま陽炎まき庭の去
まうかいて前に絶衣のぬくもり
、清盛り寄ハ江戸　着
夕涼し　ハイ駕くの御　坂
、目と親との心意ハ倫云
一輪の牡丹指まるかりびし



亞
牡丹は伽羅とこそ見ゆる　尼
柳の髪し絹簾乃　宗
雨のよある衣紋田も畝を早して
小町見とられて霽る　百雅
壷嬉を吸ふ鬼の図　西
猿の口ゆらいはらくの常乃紀
猿は肩にねらは神衣の祭見えて
白猿ひとり川鯉の神　旅
ついをこと尋て梅はさうし川
おづくと生むまきさうゝ琵琶　巷

柿園

買色　旅行
奥丹地名　農業
江戸地名　源氏
小説傳　新語
たしへ羽付る
句浄瑠璃了
おしゝかし

貞江庭　山田貞和

浮大の咲てとまんとる負　婆
白歯にさしと雲中の紫
小袖縁の人めとる丁を手始
小栗柄の出よ世をさる蔓の紫
重の庭紅も育の垣のとき
白浪の絵アうる衣
湯中て呼ぶ声又帯アを朱貴く紅
かうしもしてあるのちうひ小夜
気の紅もぬるをすみ中禅さ
騒の仙樫荒て情をもし
光む霜て振る薪雌の紗
素なしぬ素を浮氏の故宅
待も関し秋を啼く君
さく拗りして数一部の色

用心の傘を背中の一よ字
遊蕩の末ぬらハ夜役をもうし
客を寄て歩行く奥山旅
ちつ江戸や雛と出風の納鯰
小原女と赤き尻切ぬるきくる民
人をぬる路市を尻からる尻世扉
新館も笑を立て行くる
積てもしく錦の中 買
露の傘をさしむ思ひ路
並橋の中に一夜常盤川
川岸の日の下尺と五十貫
大石を懸ハ石連ね付けて来り
酒よ火から出て虎の尾を出て
今見の鈴の中よ藥ほう
歩きし母の裳の乞し槌の蕨
隆川修行し篭挟艳

雨名舎

買色 醫業
聲西 皇培君
古人名
後編出る次第おしらせ
候

閨負峨

歌枕横火て明しに恋しまうて
二王の鼻を嫌ふこそりしに
那須の葉茂りつる仮まとりし
相合傘に雪の昊せ將
日本の金玉下女の指跡
まこれや十五夜月の方
伊勢くと内のつくる吉凶
字知て合の、膝を屈して留守
たまみめる眉して涙を出ぬの鶴
吉原しつ田の積もる出つきて
にか婿の内に恋しき帰の皇
妻にしてまれを嫌ふきよの意して
習楼書画にかつかぬ扇帰
石の小とすらし貞女よ寄

居てはならしが大殿ま
たいおもう子当實の口相子
疲候ぞ立てく江の齋藤さ
月のよひ場所は居てくはなし
らかぬ静よ節です与は
抗てきん江は元の三康
媚賣ぞ取つらし進みて郎に
町で世にし神聖の基は海に
又自然な事で風雅と旅
寺に而んて意地作
社神佛も宮の承ゆう
素るの康素は構も謂のて
元日で二百俵しの小傾城
又操こを上は世の庵は
撰攻淵城ハて帆師七八歳
汐の素へ至る酒脚し富の家

猿橋負逸

難しく仲の子女人のよまれた
神縁を見れくる如の意明讀
鏡は前まとも風流はやし
沖橋よ女房に鏞ぐて
夕日かくやく鼈甲の
売るよなり門てを搖子標
鏡の母きく光る板橋
書の赤東の恵れし孫一壽の
めくめ多見は萬内喜など君
大部筥日で作なし
墨藤の明さますし風の墨藤
人形は三よ列よ縛まで
猫田地の境所しき思ひ伍
風呂をお免でなる女子業

計歌　哭絶
岩種居　塩岩
甲州塩岩　甘録
一瓶添きまえ
つまして筆
諸伊より

梅咲や刀の柄く並ひ巾
丹深しゆかりをせいしまて
ましく深も寿し土家の店舗
十疋ま二度て呼く集更し翠り椰
多く汲んで始む芳崇の京師さ
開も一區ちを思みの潤ひ
三猶第二初尾色て暮らしあき
漕乗て昆ける羽の風相葉跡
来くとらあらしさ来ふ多の庭
姿枕して六露の宿の桜暮る
同人の計の結びつく揚枝さし
の結との奥よ椿限の仕度お
枯芽の中よ京満の火彩尺百
碑八五十四歌の経にて
白魚の舞もしえ戸のくろま長
汐時や讀まして禁く流の枝

清友菴

此句の作ハよ
句を附一し
世話第一之
孫り歩き桂わ
会の紙 演城
小さき竃の句
神奈川也地名
江戸地名
それ何といふと
あし一句にカ
あしこても前句
をうつして付る
句よき無あり

清友一列 菅若拙

鶯 とまりて啼る稗府の几
、酒賊も切れる小袖の人を乗山
、排燭へ来て書送く名を元
、識を並へて浙の寄せ集
、料る杉見よ菓の柳葉
、静さハ茶を焼に煮続よ柳を
、尺まへ細よ啊ちしに小豆羽
、女身て罷てて月遠ふ針さ汀
、宗旦も下眠き东山
、涼しく嘘て捨る葉山桥
、ちを落し行り女ちこ
、鈍汁を喰一ぬくも若い内
、こうそうこ蕎麦打く花の香ひ
、接て住居らく実り良くなれハ

高之
浜猫も啼て時百ゐ六浦に
放条持ゆてこぼむ丈菊
山々のゐ梅も左よ火を捆て
てしやゞたゞこゝよ月をまつくて参
今ハ地をふと菊賣ゐ白粕子
雨よりまい都隆ゟ掖
紫の水ハ地の唐茗の中
挑灯てよを阿づる続詰
女牧を浮隠しるる一時及
子あうらハ借金も伊達
筈椽に紛のちよろ置鼓思さ
人の礼も江戸よおとしぬ末本寺
餅ハ気も只くて巳待の修泊り
贈して書しし挑灯さ子
邪くこ相ゆくゝつ心と閉く洞戸秘
流の葉浮く神ての一外

山幽菴

渋弱まゝへし
こゝの淡り甘ハ
句舗世話す一
おしもゐ外し
おゐ好むかく
すりき経ひ出
こよゐし発よ
あこ詣てう宗
句ゝ云ちえ

會堂雪飛

高
徳一分てよ称ナろ志んぶん
お松子の庵こうし渡を忘れよ
ゆ中の舩に命さ三新女届き
、椊よ泣て来しゟ赤い眼
買ゟするともそび志まし人
、二三町出てこうし主帰達ゐぬ
転よ雪の佃を丸光て
、氷つく太柁まれて影ゟまる
、二三人帆柁衣の礫よ
、考て居る枝ゆして
火のちやさせる叔て居る
本性の出入り満へ喰ひこなす
、事鴨のあしにちり漿扇
、澗泥の茅りで枝まり帰しい

一句立 焼きしをいけるいぬりの灰に元
立てあるうちに一筋縄すたとは
休せて並けて杖付き肩
蹤つ入る翁よ一本まいひご
枯草の袋の裏より地人
てらくや地むし縛る手の糸結る
ぬくぬくも毛れんて居る意れお
えづくぬてぬらく杜尾な
風らうら小粒の相に狐の毛を
椋の実の皮ようう挿り小枝甚
持よすゝ火ゝ七日んの灯を戌る
つくつて居て居る新人くし生
養の丁ホよ走り達 壹
ひへまきの中よ上りまいの甲
まへ糸へ行まる二八 頭の前
人を結ぶ 菫に結ぶ 尻の 顔

國香菴

こゝのかくら並
去年 小竹の寂と
火燵 世話
筆紙 寂
むかしより 出来
そなはしく行
噂きゐまに見
あり

菅田野女

炭売の人をぬくめて見ぬ寒し
松の枯しきらくして 寂
以山住といふて布子猶く 宿
精ておし蕨を梳る酒の葉に
九いでゝ見て九く寿み
宇治川の蹈家くの旗ふ
ロ松腰が涙てゆきゝの人ゝ
蕨まかくふ妬ている
古九年筆の呆のもちるし
湯て往還し好光し又き
塩のせうま雲扇よ絡ませる
行の新てしと宵寝と来
こうしれ枝し肩を押せる
宗うひらう来うし秋もに暖るぬる

、後宵の梅下星ハかゝる
新よ居て時くたれを百くあり
、新色中林しい茄子の切きさみ
由つるゝ實ゝ定まりぬ　株
一白之
中竹の樋へ一席は吸を　の
暫切ゝくらし　居まれ
よ麻寒よてもえゝ剝の竹
裏茄りの鉢く掛し箱の上
蘭へ來て庭る茶ゞき秋の比
雑色の火鉢ハ何ホの古地
地蕉より筍の赤い實なる
ゐ望人の移て川　終
一寸と見ゝの濡よの二本さし
蛇唯の樋戸よ光るやなぎ
樗ハ眼の上の痛角太郎
湯滑まる神よ樗の蓑衆

老梅庵

後弱まゝへし
三のの後句梅
鼻一[illegible]
食[illegible]　桜[illegible]
[illegible]　釈　[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

萱物我

嵩
、何ひつ[illegible]火ハ[illegible]ぬ　請[illegible]
実梅と[illegible]人を添ませ[illegible]
[illegible]て[illegible]を[illegible]
、口切や[illegible]建て[illegible]
、[illegible]を[illegible]と[illegible]
[illegible]て[illegible]角て居る[illegible]
、山[illegible]の[illegible]火を[illegible]
、神ゝ浦[illegible]戸[illegible]
[illegible]て[illegible]　[illegible]
[illegible]の[illegible]月
、此世[illegible]の[illegible]　灰[illegible]
[illegible]ての[illegible]梅の[illegible]
茄子の[illegible]の[illegible]　[illegible]味[illegible]

、いにしへ屋風流の雅　札
世に桜の花まで世かれ門
一句立
こゝむ文明織のとこう　誇海
秋の桃もきしき花　寺
釈迦小舟を並んで小さき
焼市なかし御笑の其くさき
老りあめる幸子かへせん神経
もみ丸の那智酒は紫藤の業
とらいまで津む泥皆の原
諏訪屋も実る家經の波層
練の付斗の十種を遠く
の縁の書に庭の芸のかくらう
さき海苔の絵をちいさき垣の冨士
うかれきりの出あり　毛　經
又しても今戸の土をあそびせん
夢や其まゝ丸の氣ぬかり

若水菴

す一隅をよく
お細よかえぬ
世にも句作ある
一しれと人情
きりすしき
たあり
能　柳玄　嗽子
上方　舟陸扇
堀合
東海の秋の花
木曽海の
神保　一の寺
應　右京の柳号

獨立　岡村陸馬

伊丹の座裡から大きな中禅寺
御書の杖を出して犬桜
雲母坂うしろの戸に松
仙人は知らで五山の梅白し
焼は辛抱深しも輝き一節
清砂によらしの節の四ッ谷
新しく気の十分な盛　流
清浄の小紅か原　六　架
判然の裡のましく書ら紅に　山
東退の薬種般て笑ふ
部屋がしく足利の　絹
いうれ目もましれ大原の平
火よ路こう川て庭しも山城
藤入は都のまへ仙ら丁

防野何使
大安数 了斗
弥楽 當読 要真晟
鄙体のるよし
浄のき武家の夕
弓乗雨 以絵口
如三百 清程 呉抜考
刀派治の名
新身の名化
河山こり之はと宝く
利よ白紀あ七
女氏 相州新寺
寝る 東北陸
新安き の徐尾
あとなく 言立
禅宗 尼 山伏
様菊 牡丹子と
たし

阿須尾よみく 揚玉の姫
七夕の寄よも絵のたく女中
個も切支る 車根の氷を
姫し情いかるく 松無大
女席も竈もきくてるめよの壱
淵川るるて菊 好の
和栂も勝るよれ 徒女の川衛
御長 新 了かれは 業すよ
のみ宗寺しに 秋を 後て 治流る
進 剛 了 節 解 村 さ 葉 笑 て
寺の 松よし 来帰く 松花
新魚 探よ 何し 全 の 和
川 寺み 何百の 了 と 鉢 鼓
比も 忘て 輝る 蘭 ふし 臥火山
来 は 秋 詠 紀 基 徒 の 笑
藤 御 よ よ 円 て 降 し 五 百 不

皓蓮社

まへてあくの西
安上 歎敬
極め 生れ
いえ 上作
旅作 玉敷
まろく
今派也 根戻
宗のこ右め三百め
えてぞろあり
とくろ 付
よし

獨立元禄調 紀了阿

美 [illegible]
、極より揺て 基 堅もちもす
、世道了のまかろのすへ 神婦れて
、焼ひの 附い不 赤しき 敷
、日 うぶしせて 揺をらへと絶一ツ
、 新 揺ど 脹る 以 黄
、 やまで 歩し 家の 寄 てるそら
、和合めの附のあ し い紙よ 似て
、 正面 揺よ 免 み 甘 白 せ よ ふ
、 此る 帰りくづよ 葉の 泉 緑よ きる
、 い 叙 土の ねるく よ 三百 平り
、 西 る て 一 般 よ 刈 片 し 妾 畠
、 弓 い 流 元 さし て 治 人
、 泳 光 よ 占 る 古 槐 豊 の 花

、下野の此地の名もれ逝て
、暢りねの井もあらゆるぬき
、松川の隣りよ歩しころの家
、春来て柳く緑の川
、庭の上おか大の男かな
、此ころかし四の君汁済
、いつよの若人摺米よし
、園む女すゑ人米の人七のゝ人
、緑つゝらぬ所つけよ居つけの国
、紫ひてらん恥秋よとさる海来の花
、大て幸中まへくきてれて取く初わけ
、わすゝひとのに霧衣の米ひらし
、抄すゝ綾を虻ねの刑
、膝生敷まん浅浅の石

いろき

紀子秋

源氏物語
つれゝ草
宝筍 漆あり
おしみ 二乃上
歌落 等禄
人精 山鳥
小さ
それ句作りし
くまよくがやし
前ゝ此テイの句
又合へし

前句
男ころ三十二才も先あとあ
、坂東声ての先陣
、上野の桜歩ゆてるる
、井戸端よ萩姫のおやへ
、浮世より据ぎしけるみ本たまら
、名ところ脇と済す薗法で
、小前話の頃もりのまの
、浅莉の成るよくねよ萩桔梗
、法のひよ結いすも刈より
、うつせとみもおけの跡よ光り君
、水浪よおだのつくた結鏡
、前かきを焚てから治の松ち
、伊勢路の桜寺よ一本
、生のひて夜かよきそのまりくす

一　玉揃の納涼静ニ秋のふけて
、ときは姫国の姫屋ニうつ湏
、国旗の山路を差して里
、粟ら人や十人分と見ゆれつき
、下座まし富士峯を見て京は秋
、茂り賓の年々大諸一生く
、足はつま節の上る九月西
、伊勢の江戸中まし臼の上
、明勝しけ間よりう深の嫁
、亀山路の嵐をと〆しら蛇
、眼の京乃教も十三
、窈さあ八汐のひろくの柊小私
、よ紀の加賀表を蒙先ま
一　小天地六番の言
、紀州上て紅かうき
、名もちつやらうと利　[illegible]

古檮菴

宿紀中一涯
弱而編句組に
すまゆうしく
此く其二編の
ケイの宿紀皆
よし
子ゟ　檮菴
人情　笑　とも

仙青蛾

尊
、程もなく浮べて雲の峰
、氷おひかわ加茂の中入
、養子ゑるたよのふ壁塚
、南瓜さへ茶やしらぬかしら
、師走沖をこえりしてまる
、妙う子ゟ馬まんとしく指のえ
、宿鍋の織のいなあの茶小判
、京の衣子もまい庵座
、茶いおろつよ六月をとゆつく
、太つさ井く小判も妙さらう
、天上日小籠合をも静
、村の日よ沖涼しくせ深
、疾うしき賢よ燻蒸の風
、すのくりくをくみのさい八垣

一 ろやしてたれは婦か古た跡
結ひ人は乃蕉めけるゆ歩
ゑたしゝ人派ゆるなりけり
蛸よ附句に智恵俵
寸の古ろしすくしと去
ゆるゆ庵の舟本まよ小松陰
尓きうむ蓮骨ゑ口未来附
井ましく痛人天狗の氷
百三 名代の蕉翁は独も波枕
嵐めくめ乃宗も柳の大和人
子安の手中かて稲の花
傘貴の山茶人するや附句
謝え乱て血力笹研
氾の添の月よ流もぶ隣乃集
夜さらしや扉ですちるを山茶る
大きく人於乃一矢此新玉

南無菴

附合これの後
半一ゑり
神秋立 ゑ事
多歌植物
山海の家と
名不地名
世この附よし
軍ふ姫ひ

正風独流 一阿坊玲周

四五吹のもきり茶子か筑の舟
雲の中ゑし 被 舟のむゑ
中居よまゝ世路たく 仙のその
海附ぞうれとほりし 凝上御
今頃しれ留 梅との桃のたる
何さ死よのりゆをうへてあるけ九
こゝろ骨と柳て小車る 麥料
果垣のしくれハ順て州ひそり
よし家て桜え世りて咲くけ笠
傘やてなあくさの花あやめ
百姓の汁の雪りて秋か汐き
長湖の式ア小路せいらし貴
乞食しくしけ峽しぬ 妙の 緒
世さ水て又初よまきれろ 吾

堀る丁晩鐘をおしてしきまり
残露はましすむ滑川
伊せの五十鈴にあびさきき雲
霞のかに二ぞかまりて見れ
新秀の稚竜了蝶
一判押て出まふ一筆
かの詩筆の端はすし毬
法施に沈んてらふほよふ皆
かふ双紙を急ぎ出てある
望の繪ら書よつるえ然
記寺の宝樹ら村中一もる
寺うつきんもまる竹人
焼を拾ひよ雲介る山
荒寮治して風く松を押きる
来ぜこうんて道井の丁
旦のきら窮よ七ふまく吉

浄土菴

法弱実もし
二句のかよう
すし宗皆名
風流人名
非秋

蓁桃亘

茶寓 寛永二年六月息了て
さ剣見てよりし非修の里
、定もて留八捲の急傳
町に名のこえ出しく聞しき
、風雅の流人器し鐘の声
、古き五山の杉一本
、さ垣よ花ひく見事さ本権
、逢ふ人郭すを乃る正
、急引し御中まちし紅枝紛
、何まう何き中て放十弓の弊
、行すも日の実取もく
、物否の界ぜん又りよ給人
　炎嬬び茶範ひの年九十
、電行如書り先栂の玄

、一茶煙きえて出替ひの無き人
玄ぬい縫する旅の供の安
、梵論ハ添ふて竹よく
、雨気の山ハ山の夕景
、うれしさや風そよぐ竿の鏡より
、蝶舞ひて夕暮れ様
、杜下木散山若の名竹麓
、はなびらの紙に汀の薄
、天児も知らぬ二人念ころね物
、人がらまする寺
、立ちた島の露に汀の苗ゆる
、何となく千代のや
、調縫ふ糸引まで井より
、焼ちる汀の墨にて
、山若も東坂も宣性さし向

迎月菴 獨立

大阪 瀬上篤初

神釈　地名
人名　植物
生類　器財
衣也　その他
雲上
其外季言
あるハ句季
ある句よこぎ
なく

夜ふても知ぬ此土の人たのみ
木芽に曉傘にせうし
詩男あひの滝に茶せん
灰とよこ蛙の席ふまうそ
よし此何家もとハこの猿曳
如らむ秋風振を咲かくし
我奥川の果ハあかり柳汁
霜を見ても日吉の知さる敵
鮎節にちらて大堰の夕桜
東大寺も泉すまれ坊主康
女房のきれハ六日廿菖蒲まそ
我おし瓢ニ菜を思ひ人あり
卯の花ハ枯れて湯治の音鉦
塵務世話しく陰し日の嵐

江戸勘弥の下若れ並続
に丹ま論并郡ま總州
伊勢の嶋与ちう嫁の山与
名ニしの錦よ梁これの麻
漢の山しを志理平四わ
壽れ鎮荻の勧うつ丹
今実もしの不二勘の那
紅の呆を錦りの珠
賞やくりて永弥の統二実
呈捷ま二御庵の水
猫さへとつた挙の高札
於ゝ山王仁甚州の丈
仏田の原の切ける呉篠
去謹ぶ採み挙柿る荻
伊豆へ移ふこ云ハ姫川一
火を吐く梅もあれこ一首 国

柿實菴

渋鶴实ゑ以へ
よもつよき方
まし付海并
一つまてたなき
たる貧方まし
秋人名 柴
罗をつまく年
、おうしこうけ
葵うけ今
月荒の与まよ
切うあり

桐亭 五三

鴬 春は例よ遠ふ鶴子の名々り珍
、汀しうみの流りよゐらん
日和ち宿ゐ佛寺聲
淵ゝ泥の影り背を千尺滑川
、只静ろり表のあけれの
扇織り景を絶ハ硯の石鰈
和月月うち見れハこひの手紙
、簾の純理の池も常滑を
紺子唱て萬さよ地震一万手
、田畑雲して五丁急ぐつく
不季仰も暦ニ冤く
、和尚凡信者ら九是の至蒔
両の温泉山の木の実を帰
ここ川てすい燈の紙の下

一句立 四文

すゝむ月をよまふ汲よ沖汁汲
唖てたゝしき主せの西賣
茶男は扱ハられもまゑえ寸
後巴ヶ之自棄し奏のまゝ
占よ川ゑ出ヶの柳ヒし
まハ粽鶴鳴のする清水汲
形四ハ方の叩まれよ減る一任
旅篭掛よ時る梢舌
富の竹序を光ふ負之
春をハまうね秋の七夕
渦庵よ十郷の篇氷
るいこのも風ハよ苗賣の口椀子
並つるこ莫聲玉の串柴子
見ゆる問書ける四花火十文
渾泥を付る大亀の秋
竹床宮よりハ三又ロ足代

甘今舎

勢ニ句の浮く
十日ねらん汲
鶴来る八
沐 駅 沂寺
人時 喜作
冬ヶ巴 地名
賣之 出新
世話句 弓馬の鳴
人名
但風様ヶ人名
そうて
珠ゑ嵌植物
茶名の子とよし
家まゝ句ゝはよし
自分まゝ其又

蕉門摺立

澤雪彦

若ゝ拵仕しても酒む人
、氷魚よりゑまゝせん就山笠
、嫁声をんり湯の手まき派宮
、辛切娑を挨ゝ子の桃しき
、やゝし之剛の盃んこおし
、笠虎杖の柳川くむ火竈
、許しら見ん坊え小く子ゝ
、一家小ゝ仏塔の年し並の嚢
、肯董のすくと枝の山
、子ゝ笑はハさせね亡八扇質
、量もひつそり墨を祝る里
、鳳仙花など咲るうり賣りゝ象
、一州よ心双を掛て古木
、傾城る派ゝし々我ゝ果

そが何よりまたに
多く紅かくしく
似るる多比

、判捨て仕立てこれくさの　楽
化偽竹の中より紅をほしうれ
、兎の雨に菴の　芋畑
丈州から乗れ月に開なくて
、蹄も舟も言めの　尉
七竹に杜若葉ハ那りまれし
、夕立やわらくの洞藤ハ日の辜る
一字か命発句にまさむ　田
、渡り人とめつゝ来るハ　丘四会
一なの来てきれむ　百遊
、そ川をすゝ寺の東　幹
蛇床まう咲てよくこく　日紅
、葵よ外の古新よおくよも
芍藥の伊豆保ぞ喜の　風
、草を此風涼しく良めくる　京
水鶏の中より垢のさし　舟

星運堂藏板誹書目録

東叡山下五條天神前　花屋舊次郎

誹諧鑴　芙蓉山人雪成撰　中本　二冊

此書ハ明和中新編出板せしより當時まで凡三編に及る江戸諸流判者高点畫抜の句を拾ひし本なり

誹諧礎　釣月堂一漁撰　小本　二冊

発句故事句の手立四季雑恋神釈を用ひ詞を五七の文字に定め

誹諧綾錦　菊岡沾凉編　全部三冊

從古今連歌師の系譜俳諧流派の傳統を引流義を志らしむ

誹諧持扇　季寄便用　懐中本　一冊

此書ハ歌書并ニ古事來由抜萃して俳諧遊の人懐中して便用を達し一本也

一

誹諧種卸 増補三國人名牒 高井蘭山先生撰 中本一冊

日本大唐天竺三ケ国の名ある人物雅俗をいはず其業をしるし傳をあらはして俳諧附句ならびに縁語をとる重宝の便とす

誹諧季引席用集 撰者同上 横本 二冊

此書ハ四季の題目名所四季附合生類植物等にいたる迄文字を訂しいろはにわけて探出し易くしてくはしく註釈を加へ俳士ハ必ず見るべし

誹字節用集 近刻 撰者同上 薄葉摺寸珍本

右の書に尚廣益し誹諧所用の物ハ端緒をしるし此書中にて仕立俳席の至宝に備ふ古今類なきものは活字の書也

誹諧増續山の井 拾穂軒北村季吟翁遺書 小本 二冊

拾穂翁ハ源氏物語を始めとしておほくの和書に注釈せし和漢の博識なるが誹諧の季立の書に注釈をしたるハ此一書なり

誹諧増補所名集 槐陽井躬之著 小本 二冊

和歌に後ろ諸國の名所古跡等を撰び古文俳諧にまじらなる事あらハ産物其所に傳へたる節説迄を挙て俳家とす

誹諧季寄屏風 古来庵存義撰 高井先生校 一双 近刻

存義老人の二季をえらく四季を一枚の屏風として席上に居てこれぞ自然と年中行事万物まで俳言をしるせるなり

誹諧手引種　一陽井素外著　中本　二冊

上の巻ハ四季并ニ神釈別離羈旅名所恋述懐画賛賀
賀ホ発句乃仕方下の巻ハ附合乃習ひ類ひ初心を為く

誹諧通言　並木舎五瓶著　小本　一冊

戯場ハ作者又ハ役者ハ浪花の産ニて東都ニ下りて業乃俳諧を長
ぜ依く此業を撰ぶ是ハ三都ハ遊里の業を書ヌ誌せし一本也

誹諧玉池雑藻　一陽井素外編　中本　二冊

此書ハ老師多年纔作ホ鉄紙委ひしが八席まて小見聞せし
事并随筆乃一本取り風流ホ接ふ人ハ此業ニ一得の事なり

山東遊覧誌　小本　二冊

此書ハ江の嶋鎌倉金沢ホ名跡を微細ホ
記し猶其外名社旧跡の縁起ホ発句を附

山東遊覧図会　北尾紅翠斎画　近刻

右の書をなしく東海道之行程を
追加挿絵を以て沢福旅行の体を写

向嶋遊覧　画景硯の水　浅草庵大人輯　狂歌を加へ近刻

大川橋より上ハ木母寺まで名所の景を
とあり其名所を一遊覧の旅人を題む

日ぐらし八景図絵　北尾紅翠斎模　摺しき摺一枚

蜀山人先生の狂詩毎一首を添ゆ
景地乃外遠景風姿を見するく図

前句新堀判者川柳考

高點誹風柳樽　小本一冊　新句年々集之出板

此書初編より当時まで六十七編ホ及ぶ
一冊ホ名ある句を撰ひ流行なる事年々
都鄙ホ口ずさむ卑雅俗これ
まひ口吟ハ其れ取り誹諧手腕とく